

使徒の働き9章3－6節 「サウロの回心」

1A 天からの光 3

2A 御声 4

1B 地に倒れるサウロ

2B 個人的な語りかけ

1C 呼びかけ

2C イエスへの迫害

3A 告白 5

1B 「主」

2B 復活された方

4A 立ち上がり 6

1B 三日間の闇

2B 新たな創造

3B バプテスマ

本文

使徒の働き 9 章を開いてください。私たちの聖書通読の学びは、8 章まで来ました。午後に、8 章全体を一節ずつ見ていきます。今朝は、3 節から 6 節に注目します。「³ところが、サウロが道を進んでダマスコの近くまで来たとき、突然、天からの光が彼の周りを照らした。⁴ 彼は地に倒れて、自分に語りかける声を聞いた。「サウロ、サウロ、なぜわたしを迫害するのか。」⁵ 彼が「主よ、あなたはどなたですか」と言うと、答えがあった。「わたしは、あなたが迫害しているイエスである。⁶ 立ち上がって、町に入りなさい。そうすれば、あなたがしなければならないことが告げられる。」」新約聖書の中で、最も劇的な回心をした人物は、サウロ、あるいはパウロです。彼は、ダマスコに向かっていたのですが、それはキリスト者を捕縛するためであり、彼は殺害することも厭わなかった人です。キリスト者を捕まえ、殺そうと思ってエルサレムからダマスコに向かいましたが、ダマスコに着いてからは、そのイエスの名を宣べ伝えるようになっていました。

手元に、今、「収穫の時代」という本があります。これは、カルバリーチャペルを通してイエス様に出会った、今は牧師になっている人々の救いの証しです。一人目は、グレッグ・ローリーさん。彼は今は、ビリー・グラハムを受け継ぐ、最も用いられている伝道者であり、また牧者です。しかし、彼の父は、幼い時に、入れ代わり立ち代わり、五人もいました。母がアル中でした。しかし高校生の時に、学校にやってきた、「イエスキチがい」と呼ばれていた元ヒッピーの伝道チームがやって来て、そこの言葉を聞いて回心しました。

次にスティーブ・メイズさんがいます。彼は天に召されましたが、日系の人々も多く住むサウスベイという町でカルバリーチャペルをしていました。彼は、そのポケットには拳銃が入っていて、二年間は浮浪者のような生活をして、お風呂にも入っていませんでした。高校の時代に麻薬に走り、数多くの犯罪に手を染めました。連邦警察である FBI のお世話にもなったことがあります。

ラウル・リースさんは、ゴールドスプリングスという町でカルバリーを牧会しています。彼はカンフーをやっていて、喧嘩好きでした。怒りの問題があり、暴行罪で、刑務所に行くか、ベトナム戦争で兵役に付くか、裁判所で選択を迫られ、ベトナム戦争に行きました。あまりもの敵を殺害したために、かえって勲章をもらったほどです。妻と子供を殺すために家で待っていたら、テレビを付けたら、伝道番組でチャック・スミスが出てきました。その場で信じ祈り、全く変えられた人間になったのです。妻は信じられず一年間は疑心暗鬼だったそうです。

ジェフ・ジョンソンさんは、ダウニーというところで牧会をしていますが、麻薬売人でした。スキップ・ヘイジックさんは、ニューメキシコのアルバカーキーで牧会していますが、霊媒にはまって、いろいろなオカルト現象を見ました。マイク・マッキントッシュさんは、サンディエゴで牧会していますが、麻薬のやりすぎで頭がおかしくなってしまう、幻覚をしばしば見ていました。

劇的な回心です。信仰とか教会とかとは、まるで正反対の世界に生きていた人々です。教会の歴史にはそのような人々でいっぱいです。古代ではアウグスチヌスは、女に溺れていました。近代では、映画「ベン・ハー」の原作者ルー・ウォーレスは無神論者で、キリスト教に敵対的であり、イエスの復活などないことを証明しようとして、研究を始めました。するとかえって、イエスの復活は歴史的事実であると認めざるを得なくなり、信仰に至って、この小説を書き上げたのです。

キリスト者を迫害するつもりが、かえってキリストの御名を宣べ伝えるサウロの回心は、決して珍しいものではなく、その後続く無数のキリスト者の回心の先駆けとなるものでした。今朝は、サウロの回心から、私たちがいかに回心するのか？を見ていきたいと思います。

1A 天からの光 3

³ところが、サウロが道を進んでダマスコの近くまで来たとき、突然、天からの光が彼の周りを照らした。

サウロを変えたのは、ここの「**天からの光**」そのものと言っても過言ではありません。この光はまさに福音そのものの光であり、これを見たから劇的な回心を遂げたと言ってよいでしょう。天からの光の中に、復活のイエスがおられて、栄光の姿に輝いておられました。彼は、この後に目が見えなくなりました。三日間、見えなくなり、飲むことも食べることもしませんでした。けれども、アナニアという弟子に祈ってもらい、目から鱗のようなものが外れて、それで見えるようになりました。そ

の後に、彼はイエスの御名を宣べ伝えたのです。この「**天からの光**」が彼を劇的に変えました。

これは、単に物理的な光ということではなく、キリストにある神の栄光でした。「Ⅱコリ 4:6 「闇の中から光が輝き出よ」と言われた神が、キリストの御顔にある神の栄光を知る知識を輝かせるために、私たちの心を照らしてくださったのです。」神が天地を創造された時に、「光よ、あれ」と言われましたが、それは神ご自身が光であられ、その中に被造物を招き入れるための光です。キリストが現れたことにより、神の栄光の中に人々を入れることを神は願っておられました。イエス様は、パウロに人々のところに遣わす理由を、こう語っておられます。「26:18 それは彼らの目を開いて、闇から光に、サタンの支配から神に立ち返らせ、こうしてわたしを信じる信仰によって、彼らが罪の赦しを得て、聖なるものとされた人々とともに相続にあずかるためである。」闇から光に、神に立ち返らせると仰っています。そして、この光は天のエルサレムにおいては、神と子羊の御座から出ているものであり、太陽も月もそこには存在せず、なぜなら光がそのまま神とキリストから出ているからです。

この光によって、パウロには復活の力が与えられていました。たとえ苦しみを受けても、死んだようになっても、それでも立ち上がることができる力を与えました。パウロが、リステラというところで石打ちにあいました。人々は彼が死んだと思って町の外に引きずり出しましたが、なんと彼は立ち上がって、町に入って行ったのです。その間に何が起こったのか？いろいろ推測しますが、おそらくコリント第二 12 章の出来事があったのではないかとされています。「12:2-4 私はキリストにある一人の人を知っています。この人は十四年前に、第三の天にまで引き上げられました。肉体のままであったのか、私は知りません。肉体を離れてであったのか、それも知りません。神がご存じです。3 私はこのような人を知っています。肉体のままであったのか、肉体を離れてであったのか、私は知りません。神がご存じです。4 彼はパラダイスに引き上げられて、言い表すこともできない、人間が語ることを許されていないことばを聞きました。」

パウロは、とてつもない苦しみを受けました。それはコリント第二 11 章に書いてありますが、筆舌に尽くしがたい苦しみです。けれども、彼がなぜ正気を保っていることができたのでしょうか？いや、なおのこと福音宣教に熱心になることができたのでしょうか？彼は何度なく、神の栄光と今の苦しみを比べているのです。「ロマ 5:2b-3a そして、神の栄光にあずかる望みを喜んでいます。それだけではなく、苦難さえも喜んでいます。」「8:18 今の時の苦難は、やがて私たちに啓示される栄光に比べれば、取るに足りないとは私は考えます。」このように、彼が神の使命を果たすにあたって、とてつもない苦しみを通るのですが、それでも彼が立ち上がることができたのは、その力は、天にある光、その栄光を見たからです。パウロは、エベソの人たちのために、「1:18 あなたがたの心の目がはっきり見えるようになって、神の召しにより与えられる望みがどのようなものか、聖徒たちが受け継ぐものがどれほど栄光に富んだものか、(知ることができますように。)」と祈っています。

2A 御声 4

⁴ 彼は地に倒れて、自分に語りかける声を聞いた。「サウロ、サウロ、なぜわたしを迫害するのか。」

1B 地に倒れるサウロ

次に彼の回心には、「**地に倒れ**」たというものがあります。それは天からの光を見たからですが、神の栄光を見て倒れてしまう人々が、聖書には出ています。預言者ダニエルは、イエス様ご自身ではないかと思われる主の使いの栄光を見て、「10:8 内からは力が抜け、顔の輝きも一変して、力も保てなくなった。」とあります。同じように、使徒ヨハネは栄光のイエス様の御姿を見て、「1:17 私は死んだ者のように、その足もとに倒れ込んだ。」とあります。これは、圧倒的に神の栄光の前で自分に至らなさ、無力さ、汚れが明らかにされた姿です。イエス様が、「マタ 5:3 心の貧しい者は幸いです。天の御国はその人たちのものだからです。」と言われました。圧倒的に自分が何も良い者がいないという悟りを得ます。それが、地に倒れたというところに表れています。

2B 個人的な語りかけ

そして回心には、「**自分に語りかける声を聞いた**」というものがあります。主が語りかける声を聞いているかどうか？であります。しかも、自分自身への語りかけです。

1C 呼びかけ

まず、「**サウロ、サウロ**」と二度も呼んでおられます。聖書の中で二度、名前を主が呼ばれる時は、親しい、個人的な関係を持っている時です。幼いサムエルに、主が語りかけられる時、「サムエル、サムエル(I サム 3:10)」と呼ばれました。マルタとマリアが家にイエス様をお迎えした時に、マルタに対して、「マルタ、マルタ(ルカ 10:41)」と呼ばれました。キリスト者を激しく迫害しているサウロに対して、なんと、イエス様はこの親しみをもって、語りかけられているのです。主がどれほど、憐れみ深いか知れませんか！主は、ご自分が憐れむ者を憐れみ、その憐れみに従って選ばれていることがわかります。みなさんは、自分が罪人であるのに、反抗しているのに、それでもこの憐れみの呼びかけを聞いたことがあるでしょうか？

2C イエスへの迫害

そして主は、「**なぜわたしを迫害するのか**」と言われました。回心には、「イエスご自身を傷つけた」という悔恨があります。パウロが迫害していたのは、キリスト者です。しかし、主はご自分を信者と一体化させておられました。主が前もって世があなたがたを憎むと言われていました。「ヨハ 15:18-19 世があなたがたを憎むなら、あなたがたよりも先にわたしを憎んだことを知っておきなさい。もしあなたがたがこの世のものであったら、世は自分のものを愛したでしょう。しかし、あなたがたは世のものではありません。わたしが世からあなたがたを選び出したのです。そのため、世はあなたがたを憎むのです。」主は、ご自分が選ばれた者が憎しみを受ける時、それはご自身が

受けていると言われています。したがって、サウロが迫害をしている時、それは主ご自身を迫害していることに等しかったのです。

私たちは、まさか自分がイエスご自身を迫害し、敵対していると思わないでしょう。自分は中立であると考えます。けれども、自分が何か人に害を与えた時、それは、神ご自身のかたちに造られた人に害を与えているのですから、神ご自身に害を与えているのです。ましてや、キリスト者に何か悪いことをするのであれば、それはキリストのものにされているのですから、キリストが個人的に受け止められるのです。このようにして、自分はキリストを傷つけたのだという自覚が、回心において必要です。

3A 告白 5

⁵ 彼が「主よ、あなたはどなたですか」と言うと、答えがあった。「わたしは、あなたが迫害しているイエスである。

1B 「主」

回心において必要なのが「主」と呼び、その通りに自分をイエスに明け渡すことです。「ロマ 10:9 なぜなら、もしあなたの口でイエスを主と告白し、あなたの心で神はイエスを死者の中からよみがえらせたと信じるなら、あなたは救われるからです。」主にするということは、自分の願っていること、欲していることを、この方の前では捨てるということに他なりません。あなたがなさることは、何でもなさってくださいという、しもべの立場です。自分にとって益になることをイエスがするから信じた、ということであれば、必ずつまずきます。何が起こっても、この方がなさることに私は従わせるという忠誠心です。

2B 復活された方

そして、回心において必要なのは、「復活したイエスに会う」ということです。使徒としての条件は、ペテロが聖霊が下る前に語ったように、「イエスの復活の証人」であるということです(1:22)。パウロは、三日目によみがえられたイエスは見えていませんが、けれどもダマスコに行く途上で、復活のイエスが現れてくださいました。「I コリ 15:8 そして最後に、月足らずで生まれた者のような私にも現れてくださいました。」そして、使徒の資格は復活を目撃しているということです。「I コリ 9:1 私には自由がないのですか。私は使徒ではないのですか。私は私たちの主イエスを見なかったのですか。あなたがたは、主にあって私の働きの実ではありませんか。」

私たちは使徒たちのように、肉体を持ったイエスに目で見える形で会ってはいません。けれども、目に見えなくとも主は生きておられ、この方に会うということが回心の条件です。

4A 立ち上がり 6

⁶ 立ち上がって、町に入りなさい。そうすれば、あなたがしなければならないことが告げられる。

最後に回心において、「立ち上がりなさい」という行為が必要です。立ち上がって、新たな歩みを始めることです。

1B 三日間の闇

パウロは、目が見えないままでダマスコに入りました。その間、ずっと暗闇でした。自分に起こったことを、頭の中で整理していたことでしょう。イエス様こそが、彼らが待ち望んでいたメシアご自身であることをパウロは確信を持ったことでしょう。回心には、このように心の一新によって自分を変える過程が必要になります。

2B 新たな創造

そして、彼はアナニアが手を置いて祈った後に、目が開かれました。そこに見えるのは、新しい世界です。「Ⅱコリ 5:17 ですから、だれでもキリストのうちにあるなら、その人は新しく造られた者です。古いものは過ぎ去って、見よ、すべてが新しくなりました。」新しく造られた者として、すべてが新しくされたのです。

3B バプテスマ

そして、サウロはバプテスマを受けます。バプテスマこそが、回心の証しです。「ロマ 6:3-4 それとも、あなたがたは知らないのですか。キリスト・イエスにつくバプテスマを受けた私たちはみな、その死にあずかるバプテスマを受けたのではありませんか。私たちは、キリストの死にあずかるバプテスマによって、キリストとともに葬られたのです。それは、ちょうどキリストが御父の栄光によって死者の中からよみがえられたように、私たちも、新しいいのちに歩むためです。」もう振り返りません。水の中に入って出てきたのですから、再び水に入ることはできません。つまり、新しくされたのですから、古い自分には戻れないのです。キリストにある新しい自分に生まれたのです。その立場を、すなわち罪に対しては死んでいるとみなし、キリストにあっては神に対して生きていると告白する子です。自分自身は死んでおり、自分の命はキリストのうちに隠されていることを知ります。

こうやってサウロの回心によって、私たちも回心をしているのかどうか、確かめることができたのではないのでしょうか？ただ漫然としていれば、回心ができるのではありません。サウロが通ったのは、ある意味、違う次元かもしれないですが、私たちも通らないといけないのです。それで、ほかの人たちの証と同じように、正反対の道を歩む力が与えられます。